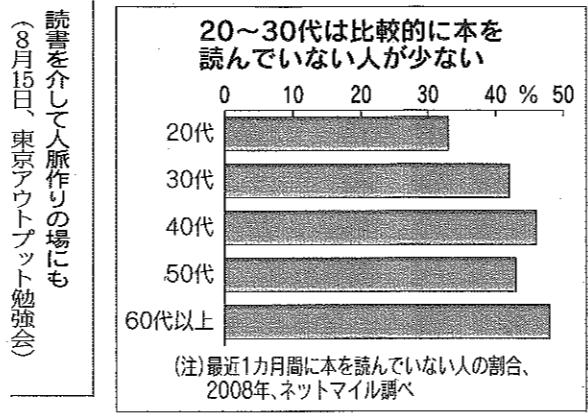
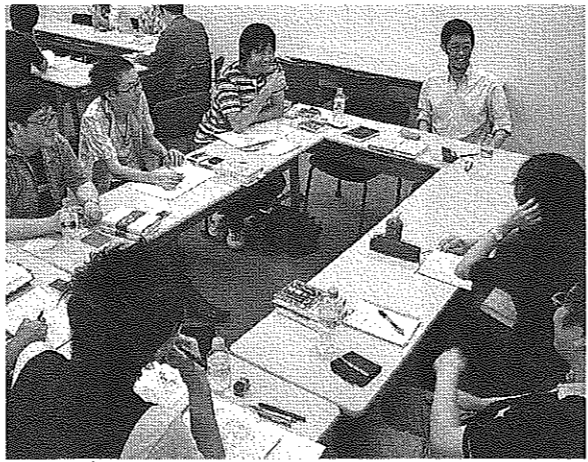


らびふプラス

同じ本を読んで語り合う「読書会」が、20～30代の間で静かに人気を集めている。交流サイト(SNS)などを通じて見知らぬ人同士が集まり、経済や環境、社会問題について意見を交わす。時には激論も交わされる読書会を若者が求めるそのココロは……。

8月中旬の土曜日、JR東京駅近くのビルの一室には約50人の20～40代が集まった。常連は顔なじみと談笑しながら、初めての人はやや緊張した面持ちで席につき議論が始まった。読書会グループ「東京アウトプット勉強会」の月例会だ。課題本は石油依存からの脱却と経済成長の実現を論じた「グリーン革命」(日本経済新聞出版社)。「僕の勤める業界はエコじゃない。時代に逆行している」「節約って言葉のマイナスイメージを変えないとダメ」。議論は時事問題からゴミの捨て方などに広がり、仕事や生活の疑問なども率直にぶつけ合う。

会を立ち上げた経営者の山本多津也さん(44)によると、もともとは2006年に名古屋で友人4人で始めた会だったという。07年からSNSで告知したところ参加者は急増。毎回の参加定員は数十人で、10000



若い世代の間でSNSなどを通じた読書会の人気が高まる一方で、昔から図書館などで開かれていた読書会は減り続けている。

20～30代になぜか人気

「読書会人気の裏には議論の欲求がある。身近では難しいため、読書会で発散している」とみるのはIT系ベンチャーの経営者、八須祥史さん(27)。08年夏に東京で2つの読書会を設立した。登録者は20～30代を中心に1年でそれぞれ約200人に達したという。

東京アウトプット勉強会の参加者でIT大手に勤める石橋聡史さん(26)もその一人。職場では仕事に関連したコンピュータの話に偏りがち。一方、友達同士では「気まずい雰囲気をつくりたくない。だから真剣な話はしにくい」。だから

読書会で激論したい

友人関係守りつつ ネット通じ腕試し

「本を読むだけでなく、感想を話し合っただけでなく、感想を話し合っただけでなく、感想を話し合っただけでなく……」

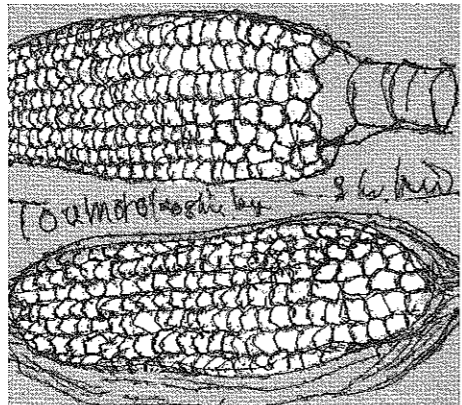
理由はそのほかにはない。出版科学研究所(東京都新宿区)によると、08年の出版物の推定販売金額は2兆177億円と、ピークの06年に比べ2割減った。にもかかわらず読書会に若者が集まるのは「ステップアップのため、議論を戦わせ知識を吸収する必要性に迫られている」とある。八須祥史さんは「背景にあるのは将来への不安だ。薬品業界で働く小山茜さん(28)はその一人。社会人4年目だが給料が上がらず、今後の働き方を悩んで

図書館などでは 10年ではほぼ半減

田区が08年に実施した調査によると、20～30代は40代以上に比べ読書をする機会自体は少ない(グラフ参照)。若い世代には読書会が新鮮なものに映っている面もあるようだ。

食あれば楽あり

小泉 武夫



画 北谷しげひさ

粒ぞろい、ンガンガ食る

両端を軽く持って口に近づけ、上歯と下歯とで中央あたりをブりと噛んだところ、はちぎれるほど膨らんでいた実が破れて、ピューッと汗が飛び出て行く有様であった。行儀が悪いが、夢中になってンガンガしながら食

と押し上げてくれる。その香味をじっくりと味わってから顎下に呑み下し、そして焼酎のロツクをガブリンコと飲(や)る。すると焼酎は、バター炒めのトウモロコシを追いかけるようにして熱く走って流れ、胃袋で合流するのであった。

あとの三本は、実だけをきれいに外し、炊き込み飯(めし)をつくった。通常のご飯を炊いて、炊飯器がカチャッと鳴って蒸らしタイムに入ったら、そこに少しの塩で調味したトウモロコシとグリーンピース(これは市販の缶詰のものでよい)を加え、蒸らしたものである。飯の白とトウモロコシの黄、グリーンピースの緑が美しく、また飯とトウモロコシの甘味を塩が引き立ててくれて、とてもおいしい飯であった。

(発酵学者・文筆家)

秋の味覚のひとつといわれていたトウモロコシも、今はだいぶ収穫が早くなり、夏の最中から出まわっている。今年は雨が多かったが、我が輩のところに送られてくるものは、どれも実が大きくすっしりとしていて、煮たり、蒸したり、焼いたりして食べることもおいしい。

先日福島県南会津の知人から大量10本も送られてきて、うれしいやうにうれしいやうに存分にトウモロコシ気分を満喫した。早速外皮をむき、10本全部を大鍋で茹でた。茹であがったもののうち5本は熱いままをラップで包んで冷凍庫に入れ保存した。これは後日、解凍してさまざまな料理の材料に使えるから重宝だ。

茹でたての一本は、塩をパラパラと振ってから、熱いのでハフハフしながら丸かじりした。

トウモロコシ